

浜嶋です。

おはようございます。

B P祭のポイントハイクの途中で所用があり、B V S 隊と別れ、辻ヶ池公園に向かいました。途中で、坂口副長が「ヤングB Pです」と頑張っていました。本物のB P（16団山本さん）に出会い、B Pはずいぶんと肥えられたなぁと感じました。

辻ヶ池公園に着くと、下村副長と保護者が熱心に話し合いをしていました。B V S 隊の保護者会を池田で行った後、公園でも続いていたのです。

口出ししてまずかったなと思い、B V S 隊が10分～15分遅れで到着することを伝えてお別れしました。

さて、口出した話について、考えたことです。

「狭い道や歩道は、真ん中を歩いては危険だ」ということを意識したのは子供が小学生ごろになった40歳ぐらいの時です。

吹田市の亥子谷に住んでいました。南千里から岸边に向かう道の歩道は結構人通りが多いです。子供と歩道を歩くとき、子供はすぐに歩道の真ん中を歩いてしまいます。

前から自転車が来ると当然ぶつかります。右に除けるか左にしようかとお互いが悩むことはしばしば経験することでした。それから、私は、必ず右側を歩くことにしたと記憶しています。最初から右側を歩いていれば、自転車に気付かなくてもぶつかる心配はないのです。子供に何度も注意しました。そのときは、言うことは聞きますが、けっして理解していたとは思えません。

隊活動で道を歩くときは、1列で歩きます。そして、指導者が最も注意深くスカウトを見守るときです。前後で自動車が来ることを大きな声で知らせます。

隊活動で安全に歩行するためには、指導者が安全対策を徹底的に行う方法とスカウトが自ら身を守ることです。どのような方法を取るかは、その時の環境次第で判断されるべきものと思います。

より安全な対策をとれば、安全を確保できます。スカウトに任せれば危険が伴います。しかし、スカウトはいつも指導者や保護者と行動を共にしているわけではありません。

成長するにつれて一人で道を歩くことの方が多くなるのです。事故を起こさないように保護者は常の注意を喚起させていると思います。私は、スカウトが自立できる指導をすることが最良の活動だと思います。

スカウトに手を貸すのは、よほど危険な山道を歩く時ではないでしょうか。普通の道を歩いているときに、側溝に足を突っ込んだスカウトがいました。大きな側溝に体ごと落ちたスカウトもありました。

これらは、スカウトの自覚なしでは防ぐことができません。

一列で歩くときに、保護者も一列で歩いているでしょうか。指導者も必要な時以外は一列で歩いているでしょうか。私は、カブ隊の隊長をしていたときに、スカウトよりも指導者に歩き方を注意しました。

見本になってほしいからです。活発なスカウトは、自分たちと大人たちを比較するでしょう。自分たちだけ1列で歩くことに疑問を持つでしょう。

私たちは、スカウトを指導したり教育をするときに、まず見本となることが大切です。

私は、2列で歩いてもいいと思うことがあります。

ベルギーのブリュッセルの公園で、日曜日にカブ隊の大会がありました。遠くから眺めていましたが、20人ぐらいの隊がだらだらと歩いていました。「だらしがいいなあ」と思いました。

しかし、立ち止まり、何かを言いました。その雄たけびが聞こえてきてびっくりしました。

集中できていることに驚いたのです。当時は、吹田19団で

整列を厳しく指導していました。その指導に疑問を感じました。公園の中はゆったり歩いた方が楽しい。でもあの集中力はどうしたら真似ができるだろうか。とても羨ましいと思います。

山歩きでは2列で歩きたいという願望を持っています。2列でも迷惑をかけない、危険もない場合です。スカウトは隣のスカウトと話しながら歩くことができる。その方が楽しい。

まあ、いろいろあります。「なぜ?」、「なぜ?」に答える指導で、スカウトの自覚を促すことが重要だと思います。

一方通行の指導を改善することが必要かと思います。スカウトに安全はどのようにすれば確保できるかの指導にもう少し力を入れて、スカウトの自覚が高まることを目指していきたいですね。

私の目標と実践

～保護者の理解が深まれば、2団が変わります。全員でスカウトを育てよう～